

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第4回 「アフリカの軽井沢」のウガンダでスタディ・ツアーを

秋の深まる日本の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。カンパラ通信の第4回目は、この時期から2か月前程遡ったこの夏のお話をしたいと思います。因みにここカンパラは北緯1度くらいとほぼ赤道直下にあるため四季には全く縁がありません。あるのは雨季と乾季です。というので、ここで暮らしている限り春とか夏、更には秋とか冬といった単語を使う機会はめったにありませんし、そういう単語を使ってもウガンダ人にはピンと来ないだろうと思って、あえて使わないようにしているというのが正直なところです。

さて今年の日本の夏も猛暑日が連日のように続き、大変暑かったと聞いております。それとともに8月後半からは例年になく多くの台風が日本列島を襲い、強風と集中豪雨による堤防の決壊や土砂崩れなどで各地に大きな被害をもたらしましたね。また、大きな地震もありました。被災地の皆様には深くお見舞いを申し上げます。

日本でそのような大変な真夏から残暑の頃にかけて、ウガンダには日本から幾つかの大学生のスタディ・ツアーがありました。そのうち三校の大学生が大使館を訪問してくれました。今日はその時の話を紹介したいと思います。



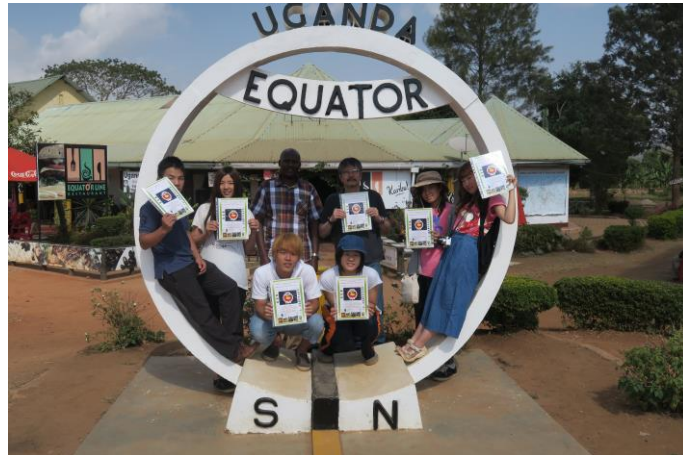
(写真1：大使館訪問時の鳥取大の学生グループと筆者)

順に申しますと、8月第4週に相前後して鳥取大学、神戸大学の学生グループが、そして9月に入って横浜市立大学の学生グループがウガンダを来訪され、お忙しい中私に挨拶をと大使館まで足を延ばしてくれたのです。それぞれのグループは10人から13人くらいの学生と引率する講師で構成されています。興味深かったのは鳥取大学で、同大学に(留学中の)所属しているウガンダ人のフランク・カレマ氏がコーディネーターとして(日本から)

付き添って来ていました。

各ツアーの訪問先は、経済・国際関係・開発援助などのスタディ・ツアーの目的に合わせて、それぞれです。マケレレ大学でアフリカの歴史やウガンダの教育制度を聴講して現地の学校を訪問したり、企業視察をしたりするグループもあれば、ナイル架橋建設現場や海外青年協力隊の活動等日本が行っている経済協力サイトの訪問を主体とするもの、こういった視察に加えて現地の有識者との懇談を含めたりするもの、と多種多様です。この他、アフリカならではのサファリ・パークやエンテベ空港近くで野生生物センターの訪問等を織り交ぜたりもしています。

大使館にいらっしゃった際には、学生の方々には自己紹介してもらうとともに、ウガンダに来る前のアフリカのイメージと来てからの印象の違いなどの感想を語ってもらいました。それを通じて私がわかったことは、「学生一人一人がバーチャルの世界に留まるのではなく、現実に自らの肌で感じる体験をすることの大切さを実感してくれたこと。」の一言につきるのではないかと思います。今、文科省では、日本の若者が将来グローバルな人材として活躍できるようになることを目指して、海外留学を奨励したり、今回のようなスタディ・ツアーを組んで大学生が海外を体験することを後押ししていると聞いております。そういう流れの中で、スタディ・ツアーの訪問先として世界各地いろいろなところがあると思います。世界のどこをとってもその地域についてバーチャルなイメージと現実が乖離しているのではないのでしょうか。しかし、その意味ではアフリカほど日本社会全体に浸透しているイメージと現実がかけ離れているところはないでしょう。それだけにアフリカを訪問先を選ぶことの意義が高いと感じております。他方、引率される教職員の皆様が訪問先を選定する上での前提条件は、スタディ・ツアー参加学生が無事に事故もなくツアーを終えて帰国できる国や地域をとということではないのでしょうか。そういう意味で治安がしっかりしたところでなければならないとの考慮は重要です。テロ事件が頻繁に起こったり、いつ路上で強盗に遭うかもしれないというところに学生を連れていくわけにはいかないでしょう。



(写真2：赤道モニュメントでポーズをとる神戸大学生)

以上のことを総合すると、ウガンダはスタディ・ツアー先の訪問先の国としては穴場ではないかと私は自負しています。

まず、イメージと現実との懸隔が甚だしいアフリカの一角の国であること。次に治安面でいうと、諸外国訪問時のように夜独り歩きをしない・スリに気を付けるといった一般的な注意事項の他に、歩道を歩いていてもボダボダというバイク・タクシーに気を付けるといった当国特有の留意すべきことはありますが、それらを除けば安全面でしっかりしていることです（とはいっても、日本とは治安状況が異なることや、疾病にかかるリスクについては、ウガンダを十分に楽しみながらも、しっかり注意する必要があります。）。

それに付け加えて、このエッセイの最初にも書きましたが寒い季節が無い気候の温和さとウガンダ人の親しみ安さが何と言ってもケース・スタディ先として抜きん出ている国だと私は思うのです。カンパラを含めたウガンダの赤道付近は、ここに住む私達が「ウガンダはアフリカの軽井沢」というくらい温和な気候を1年中味わうことができる地域です。「ウガンダはアフリカの軽井沢」、この表現は日本人の多くが「アフリカはどの国も暑い」という先入観を払拭するに相応しい表現だと私は感じております。ウガンダは寒くても摂氏10度未満にはならず、暑くても30度以上になることはまずありません。雨季と乾季があるにせよ、湿度も高くも低くもありません。気温も湿度もそんな風ですから、「灼熱のアフリカ」ということにはなりません。今回のスタディ・ツアーのように大学の夏休み期間の8月にウガンダを訪問するのは避暑に来ると言っても過言ではありません。

次にウガンダ人の親しみやすい国民性です。ウガンダ人は、話し方が静かで穏やかで、互いに目が合いこちらから微笑みかけてゆくと街角を歩いている兵士でも警察官でも微笑み返してくれます。私もよくスーパーマーケットのレジの女性と目が合うと軽口をたたいて

います。ウガンダ人の生活は一般にスロー・テンポで、歩く速さも私にはとてもゆっくりに感じられます。ウガンダ人と一緒にいるとゆったりとのんびりした心豊かな時間が過ごせるように感じます。そして特記すべき一つが小学生以上のウガンダ人であれば誰でも英語を話すことができるということです。ウガンダの小中学生は日本人よりはるかに英語が上手でしょう、その上親睦的な国民性はコミュニケーションをとる面から見逃せないことです。

因みに、ウガンダの最高峰の大学は、国立マケレレ大学です。マケレレ大学は非常に開放的で、既に多くの日本の大学と提携し研究を進めている分野があります。私たちが調べたところでも、先に挙げた鳥取大学の他に、早稲田大学、京都大学といったところが既に文書を交わして学生交流や研究交流を実施しています。たぶん、大学当局が把握していない学部間の協力や教授間の交流もたくさんあると思います。そして、この11月には岡山大学の学長がウガンダを来訪してマケレレ大学と学術協力の文書に署名する予定になっています。このように、大学生同士の交流も容易ですので、これもウガンダをスタディ・ツアー先とするメリットのひとつです。



(写真3：マケレレ大学での学生交流中の横浜市立大の学生グループ)

これを読んだ大学教授その他の講師の方々や学生の皆さん、来年は猛暑の日本から足を延ばし過ごしやすい環境のウガンダで学術調査の有意義な夏休みを過ごしてみませんか。大使館では皆様をいつでも歓迎し支援しております。そしてウガンダの事情や日本との関係について皆さんに説明する時間を大切に考えております。ウガンダにお出かけ前に、またウガンダにいらした折には是非大使館にメールや電話でお知らせください。治安面で注意すべきことを事前にお知らせすることもできますし、カンパラ到着後最新の情報をお伝えすることもできます。

皆様のご来訪を心よりお待ちしております！

(以上)